

政治家と漢字力



野村雅昭

少し前に、「老人力」(1998)ということばが流行語になったことがある。作家の赤瀬川原平氏の造語によるものだ。これがはやった理由は、「老人」と「力」という一見相反する要素が結合することによって生ずる奇妙な感覚がおもしろがられたためだろう。マイナス要素である、物忘れ、ぼけなどに潜む未知の力が老人力なのである。ミスマッチングの魅力と言ってよいかもしれない。このミスマッチに近い「〇〇力」の系列には、「鈍感力」(2007)などがある。

ところで、今年になってまた「〇〇力」がはやっているらしい。8月中旬に出版された書籍の名にも、「煩惱力」「演説力」「逆境力」「田舎力」などがあるということだ(朝日新聞, 2009. 8. 28)。今年話題になったトップは、自民党が衆議院選挙のマニフェストに掲げた「責任力」である。麻生前首相の造語ではなさそうだが、同氏の口から発せられたのは記憶に新しい。そのあいまいさの故かどうか、自民党は惨敗を喫した。

これらが造語として不安定な感じを与えるのは、意味的なミスマッチングのせいだけではない。「〇〇力」の「〇〇」の名詞としての性格にも原因がある。もともと「〇〇力」には、「影響力」「決断力」「実行力」「破壊力」「耐久力」など、〇〇に「する」がついて動詞になるものが圧倒的に多い。もっとも、「する」がつかない名詞が来ることがないわけではなく、「原子力」「政治力」「精神力」などは、辞書にも載っている。しかし、初めて聞く「〇〇力」がこの「する」類である場合は、それほど抵抗感はない。「老人力」「責任力」に一瞬たじろぐのは、そのことが関係している。

麻生前首相の人気の傾きははじめたのは、去年の11月ごろだという。「未曾有」「踏襲」「頻繁」などの語の

読み間違いがマスコミで大々的に取り上げられた。今回の選挙の敗北がそのせいであるとするのは言い過ぎだが、少なくとも政治的な信頼感が失墜するきっかけになったことは否定できない。このニュースは中国のマスコミでも盛んに取り上げられたそうだが、はたして中国でも漢字が読めないということは、日本と同じように人格的な欠陥に等しい扱いを受けるのだろうか。そうだとすれば、漢字社会における「漢字力」の欠如は恐るべき結果を招くと言える。

「語学力」という言い方はかなり昔からある。「英語力」にも、抵抗はほとんどない。それに比べれば、「漢字力」は最近のような気がする。2007年には「言語力育成協力者会議」なるものが文部科学省に設置されている。このころから言語に関する能力を「〇〇力」と言い習わすことが普通になったようだ。「日本語力」なども耳にするようになった。漢字の能力検定がピークに達したのも、このころだ。「漢字力」にしても「英語力」にしても、「〇〇を使いこなす能力」ということである。これらの〇〇には「する」はつかないが、不自然ではない。

麻生太郎氏の演説は、決してへたではない。委員会などでの野党議員との応酬も聞きごたえがあった。その前の二人の総理大臣よりも、迫力があつた。それがいくつかの漢字の読み間違いで、とんでもないことになってしまった。わたしたちの言語使用能力に対する評価は、いちじるしく文字言語に傾いている。漢字力に優れていなくても、談話力や講演力で評価される政治家を、わたしたちが指導者として持つことができる日はいつ訪れるだろうか。

(のむら まさあき・早稲田大学名誉教授)